

「ユダの裏切りの企て」

2014年11月19日

マルコによる福音書 14章 10節～11節 十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

イスカリオテのユダは主イエスから「これと思う人々」の一人として弟子に選ばれながら、師を裏切り、エルサレム神殿当局に引き渡した。ユダは、なぜ裏切ったのか。その理由を知りたいと誰もが思う。聖書の記述から三つのことが考えられる。

第一の理由は金銭目的である。マタイ福音書は、ユダは神殿当局から銀貨 30 枚を受け取り、引き渡す約束をしたと記している。銀貨はおそらくデナリオンであろう。1 デナリオンは1日の生活費であるから、30枚は一ヶ月分の生活費に当たる。確かにヨハネ福音書は、ユダは主イエスの伝道隊の会計係で中身をごまかす金銭に汚い人であったと記している。しかし、ユダほどの才覚のある人が、1ヶ月分の生活費を理由に、師を裏切ったとは思えない節がある。第二の理由は愛憎の葛藤である。ユダは主イエスを愛し、愛に満ちた言葉と業に強く惹かれていた。しかし、その愛には憎しみが内に潜んでいた。愛するゆえに憎しみが燃えることはあり得る。太宰治は『駆け込み訴え』の中で、その愛憎の葛藤を描き出している。他の弟子たちがガリラヤ出身であったのに対し、ユダだけがユダ出身で、他の弟子たちと距離があり、それが愛憎を増幅させたとも考えられる。第三の理由はユダが求めたキリストと主イエスが示したキリストの間に大きなギャップを見たということである。ユダは、主イエスにローマ帝国からの独立、解放をもたらしてくれるキリストを求めていた。ところが、エルサレムに向かってからの主イエスは、政治的解放者ではなく、死にゆく道を歩んでいる。神殿当局の動きを察知したユダは、主イエスの死は避けられないならば、売り渡し、わが身の安全を図った方が得策であると考えた。私は、第三の理由が濃厚であると思っている。

また別に、聖書の記述からではないが、ユダは主イエスを最も深く理解し、主イエスの指示を受けて、十字架の死へと売り渡したと主張する人がいる。いずれにしても、裏切った理由を定かに知ることはできない。

ユダは師を引き渡す時、愛のしるしである「接吻」を合図にしている。普通の神経から逸脱している。しかし、主イエスに死刑判決が下された時、良心が咎め「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言って、一たんは、受け取った銀貨 30 枚を神殿内に投げ返し、首をつって自死した。使徒言行録は「体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました」と悲惨な死を伝えている。これは、師を裏切ったユダに対する、初代教会の憎しみを著したものであろう。ユダは屈折した人だったが、良心の呵責に耐えられず、自死を選ぶような面もあったことを示している。ユダの心の中には、深い闇があり、その闇に引き寄せられて、裏切る行為へと進んでいったのではないか。そして人は皆、自分の心に闇を持っているから、ユダに自分と重ね合わせて見る。

このユダは、主イエスの赦し、救いに与っているかという議論がある。ユダに対する非難は大きいですが、ユダも主イエスの十字架の赦しの中に招かれていると信じる。ユダが排斥されたら、ユダと同じ私たちは救いに与ることはできないでしょう。